

研究論文

看護学生が記述した高齢者とのエピソードの特徴

－「場面設定」と「中心テーマ」の視点から－

矢野 麗子・高岡 哲子・榊原 千佐子・小堀 ゆかり

(2011年12月22日受稿)

抄録： 本研究の目的は、看護学生が記述した高齢者とのエピソードを「場面設定」と「中心テーマ」の視点から特徴を明らかにし、老年看護学教育の基礎資料とすることを目的とする。研究協力者は4年生大学看護学科2年生175名であった。データ収集は“最も良く覚えている高齢者との体験を100字程度”の自由記述で実施した。データ分析は、記述された文章の「場面設定」と「中心テーマ」を明らかにし、研究者間で内容を検討した。

記述されたエピソードは「9場面」で「生き生きとした高齢者とのふれあい」<現在の日常の出来事><高齢者との別れ><納得のいかない出来事><子どもの頃の思い出><仕事や学習の場での出会い><知らない人との出会い><病気の高齢者とのかわり><ボランティアでのふれあい>が場面設定として抽出され、この中で2-9の「中心テーマ」が抽出された。

看護者が持つ対象者のイメージは、看護に対する姿勢を形成する基となる。そのイメージ形成は、関心の強いエピソードから印象づけられることも多い。対象者のイメージが看護活動に影響する事を考えると、学生との間で印象づけられたエピソードや高齢者の言動の意味を討議し、高齢者を見る視点が養われるよう教育的にかかわる必要性が示唆された。

I. 緒言

老年看護学において、高齢者の健康や疾病、障がいの状態や程度がどうであれ、老年者自身も持っているパワー（生命力、英知、生きる技法）を洞察し、自律への志向性を信頼し、支援することに発想を転換する必要があるとされている¹⁾。これを可能にする者を育成するためには、高齢者のポジティブな側面に着目し、高齢者自身の持っている力を発揮してもらえるようなかわりができるように教授する必要がある²⁾。しかし、現代の学生は、全体的に社会経験が少なく生活体験に乏しいため、高齢者に対してどのように接したらよいか、高齢者の行動をどのように理解したらよいかかわからず、苦手意識を持つ危険性もあ

る。このような状況で、学生が入手しやすいマスコミなどで取り上げられる高齢者の情報は、詐欺の被害であったり、孤独死といったネガティブな内容が多い。このことから、学生が高齢者に対してマイナスのイメージを持ちやすい現状がある³⁾。核家族化が進み、高齢者との接触がない学生が増加している中、このような学生が、高齢者を理解し、高齢者の尊厳を踏まえた看護が思考できるために、高齢者のイメージをよりよく形成していくことは難しい⁴⁾。しかし、看護者がもつ高齢者のイメージは、老年看護に取り組む姿勢を形成する源となり、看護の質・内容に影響を及ぼすといわれている^{5,6)}。そのため、老年看護学教育にあたる者として、学生の高齢者に対する受け止めやイメージをあらかじめ把握しておくことは非常に

重要と考えられ、これを捉えることは、老年看護学におけるレディネスの把握へと繋がるものと捉えている。

学生の高齢者に対する受け止めやイメージ形成の要因に、過去の高齢者との接触経験⁷⁾や、親の高齢者に対する接触や姿勢が、子の高齢者へのイメージに影響を与えている⁸⁾といわれている。そこで、学生の高齢者との接触体験を知る手掛かりとして、最も良く覚えている高齢者との体験エピソードの記述から、学生の高齢者に対するレディネスの一部を検討し、老年看護学実践の質の向上に寄与できるよう教育方法の示唆を得ることが重要課題である。

Ⅱ. 研究目的

看護学生が記述した高齢者のエピソードを「場面設定」と「中心テーマ」の視点から特徴を明らかにし、老年看護学教育の基礎資料とすることを目的とする。

Ⅲ. 研究方法

1. 研究協力者

本研究の協力者は、看護大学看護学科2学年の162名中、同意が得られた157名であった。

2. データ収集方法

2-1) データ収集期間

200X年から2年間であった。

2-2) データ収集方法

「あなたが今までもっとも良く覚えている高齢者との体験についてお尋ねします。(1) その良く覚えている高齢者とあなたの関係(問柄)は?(2) その高齢者との体験を100字程度で書いて下さい。」とテーマを提示し、自記式による集合調査法にて実施。調査は2年次4月から始まる専門科目である老年看護学概論の最終講の最終の時間に10分間実施した。

3. データ分析

質問内容の(1)である高齢者との関係については単純集計を行った。(2)高齢者との体験については「場面設定」と「中心テーマ」に焦点をあててキーセンテンスを抽出した。キーセンテンスはできる限り協力者の記述した言葉をそのまま用いることとし、最小限必要な部分のみ前の言葉を補った。次いで、場面設定を中心にカテゴリー化し、中心テーマを抽出した。研究のどの段階においても老年看護学の研究者2名以上で検討した。

4. 倫理的配慮

調査は無記名とし、実施にあたっては、研究目的および成績には全く関係しないことを説明し、同意を得た学生のみを実施した。また、収集したデータは研究テーマ以外には使用しないことと、研究終了後はすべてのデータを消去することも合わせて説明した。調査は途中で中断して良いことを伝え、間接回収法を用いた。

Ⅳ. 結果

1. 記述されたエピソードの対象

記述されたエピソードの対象は、曾祖父母が5件。祖父母は92件。知人が11件。知らない人が49件であった。知らない人とは、車を一緒に待っていた高齢者。バス停留所やバスの中で一緒になった高齢者。公園に来ていた高齢者。アルバイト中の顧客として的高齢者。ボランティアで知り合った高齢者。高校で企画された看護体験の時に出会った高齢者。小・中学生の時、授業で訪問した老人ホームの高齢者であった。

2. 記述された場面と中心テーマの概観

本研究において記述されたエピソードは「9場面」で、各場面において2-11の<中心テーマ(記述数)>が抽出された。エピソードの「9場面」は、「生き生きとした高齢者とのふれあい」「現在の日常での出来事」「高齢者との別れ」「納得のいかない出来事」「子どもの頃の思い出」「仕事や学習の

場での出会い」「知らない人との出会い」「病気の高齢者とのかかわり」「ボランティアでのふれあい」であった。以下、中心テーマのデータ数を()内の数値で示す、また、内容の概観を表1に示す。

2-1) 生き生きとした高齢者とのふれあい

この場面の中心テーマは、＜一緒に過ごしたうれしさ (3)＞＜一緒に遊べたうれしさ (1)＞＜勉強になった高齢者の言動 (9)＞の3テーマが抽出された。このうち、＜一緒に過ごしたうれしさ＞＜一緒に遊べたうれしさ＞の対象は、すべて祖父母であった。＜勉強になった高齢者の言動＞では、半日のグループホーム体験や高校3年生の時の訪問看護の一日体験での出会い、高校生の時のボランティア活動で高齢者と一緒にゲートボールをした時の経験から生じていた。これらの体験時の高齢者との会話内容の他、生き生きと語る高齢者の表情が印象的であったところから、今まででもっともよく覚えている高齢者として印象づけられていた。

2-2) 現在の日常での出来事

この場面の中心テーマは、＜うらやましく思われた経験 (1)＞＜一緒に過ごせたうれしさ (1)＞＜感謝されたうれしい経験 (1)＞＜好みと一緒にだと思われうれしさ (1)＞＜高齢者の疲れやすさを実感した経験 (1)＞＜納得した演歌好き (1)＞＜勉強になった高齢者の言動 (1)＞＜迷惑をかけて申し訳ない気持ち (1)＞＜優しくされたうれしさ (5)＞の9テーマが抽出された。＜優しくされたうれしさ＞の1データの対象は知らない人であったが、残り全ての対象は祖父母であった。祖父母との同居の有無は不明だが、一緒に買い物へ行った時のエピソードや、お正月の祖父母の様子、無理に食べ物を食べさせようとする祖母の姿や、一緒に犬の散歩をした時に高齢者の体力の低下を感じたというものであった。また、協力者が大学進学をする際、現大学は第1志望校ではなく、それを知っていた祖父母が、大学進学のための引っ越しの日に、遠くからかけつけてくれ「がんばりなさいよ」と言って抱きしめてくれたとい

うものから、＜優しくされたうれしさ＞が抽出された。

2-3) 高齢者との別れ

この場面の中心テーマは、＜離れて過ごす寂しさ (1)＞＜印象に残る初めての死の経験 (3)＞＜勉強になった高齢者の言動 (2)＞の3テーマが抽出された。＜離れて過ごす寂しさ＞では、大学進学のための単身生活に切り替えた際に感じたことから生じたものであった。また、生まれて初めての死との対面では、その対象は祖父母であり、その対象の最期の言葉が「おまえの手ええ、あったかいなあ」であり、とても印象に残っているとあった場面からの抽出であった。＜勉強になった高齢者の言動＞では、祖父母が他界する1週間程度前に話した会話の中で「がんばれよ」と伝えられたことや、「わしは畑で死ねれば本望だ」と言っていた祖母が、体調の良くない最後の最後まで畑仕事をいつも通りして死んでいったその姿から抽出された。

2-4) 納得のいかない出来事

この場面の中心テーマは、＜価値観の違いを実感した (2)＞＜話を聞いてくれない憤り (1)＞＜複雑な思い (1)＞の3テーマが抽出された。＜価値観の違いを実感した＞では、自分が初めて髪を染めた時、不良になったと間違われしばらく祖父母から無視された経験や、祖母がハワイへ行った時にハンカチをお土産にくれたので大切にしまっておいたが、それを祖母に説明したら、忘れてしまっていたことから抽出された。＜複雑な思い＞は、祖母は何度も同じ事をくりかえし聞き、それでも聞きとれない時はわかったふりをする行動から抽出されていた。

2-5) 子どもの頃の思い出

この場面の中心テーマは、＜一緒に過ごしたうれしさ (13)＞＜一緒に遊べた楽しさ (7)＞＜一緒に遊べなくなった悲しさ (1)＞＜感謝されたうれしい経験 (2)＞＜怖いと思ってしまった経験 (2)＞＜大切な人を失う寂しさ (2)＞＜大切にされたうれしさ (1)＞＜勉強になった

高齢者の言動 (13) ><迷惑をかけて申し訳ない気持ち (3) ><優しくされたうれしさ (25) ><理不尽な思い (1) >と11テーマが抽出された。9場面の中で最も記述数が多く68場面の記述があった。そのうち54記述の対象が祖父母であった。祖父母以外の対象は、保育園の園長先生や小学校の校長先生、隣人、祖父母の友人といったように、見ず知らずの高齢者との接触は、この場面での中心テーマでは少ない。<一緒に過ごしたうれしさ>では、よく讚美歌を歌ってくれていたこと、一緒に旅行や外出・散歩をしたこと、両親が働いていたため家事の全てを祖母が教えてくれたことから抽出された。<感謝されたうれしさ>では、祖母と買い物へ行き重い荷物を一生懸命持ってあげた時にお礼を言われたことや、ボランティアで老人ホームへ行った時、ずっと同じ話をきいていたら、最後にまた絶対来てねと言われたこと。両親が不在で祖父母に昼食を作った時、美味しくないにもかかわらずありがとうと感謝してもらったことから抽出された。<怖いとってしまった経験>は、自転車で転んでしまったおじいさんに起こして欲しいと言われたが、怖くて人を呼ぶことしかできなかった。親戚の見舞に行った際、入院中の知らないおじいさんに声をかけられ、体を触らせて欲しいといわれた経験から抽出された。<勉強になった高齢者の言葉>では、リウマチで入院中の祖母を見舞にいくと、話すことができなくなっており、手を握りながら口をパクパクさせ、手を使って伝えられることがあるということを知った経験。祖父は戦争で樺太に行っており、その話をきいたことから戦争の怖さを知った。祖父は農業を営んでいたため、植物について沢山教わったという経験から抽出された。<迷惑をかけて申し訳ない気持ち>は、祖父の猫を見たいといったら、自分の鼻を猫にひっかかれ、手当してもらったことや、祖父が遊び相手になってくれたが、祖母は高齢だったのですぐバテていた姿を想起したことから抽出された。<優しくされたうれしさ>では、祖父母の家に泊まりにいった時の

エピソードが多くみられた。

2-6) 仕事や学習の場での出会い

この場面の中心テーマは、<感謝されたうれしい経験 (2) ><信頼されたうれしい経験 (1) ><勉強になった高齢者の言動 (2) ><理不尽な思い (1) >の4テーマが抽出された。この場面での高齢者と協力者との間柄は、特につながない知らない人であった。感謝や信頼を得た経験、勉強になった高齢者の言動の場面では、バイト先での出来事で何もわからない高齢者に対し、詳しく丁寧に商品説明をしたり、自分の話し方はやく何を言っているのか聞きとれないと言われて、ゆっくり説明すると感謝されたといった内容であった。理不尽な思いもまたバイト先の出来事であり、バイト先に顧客として来ていた高齢者にオーダーのためにメニュー表を出したら、パチンコで負けていた様で機嫌が悪く手を払われたという経験が抽出されていた。

2-7) 知らない人との出会い

この場面の中心テーマは、<感謝されたうれしい経験 (7) ><怖いとってしまった経験 (2) ><席を譲る経験 (2) ><勉強になった高齢者の言動 (3) ><迷惑をかけて申し訳ない気持ち (1) ><優しくされたうれしさ (4) ><理不尽な思い (2) >の7テーマが抽出された。感謝されたうれしい経験では、日常生活の中で、重そうな荷物を持った高齢者の荷物をもってあげたことや、高齢者に道を聞かれて説明したこと、バスや地下鉄で席を譲ったこと、スーパーでの買い物の荷物をタクシー乗り場まで運んだ経験であった。また、優しくされたうれしさでは、ハイソックスをはいていたら寒くないかいと気づかってくれたことや、電車で友達とたわいのない話をしていたら優しい口調で、楽しそうでいいねと話かけてくれたことであった。怖いとってしまった経験では、バスのステップが氷ついていてそのステップで高齢者が激しく転倒した場面に遭遇したことや、駅のエスカレーターで急いでいたので通して欲しいとお願いしたら、高齢者を馬鹿にするなど

怒鳴られたという経験であった。また、理不尽な経験では、駅のエスカレーターで小走りをしていたら「消えてなくなれ!おまえみたいなやつ!」と怒鳴られた経験や、電車に乗っている際、途中から高齢者が乗ってきたが優先席が空いていたのでいいかと思って座っていたら、自分の席を譲れと言われたことであった。

2-8) 病気の高齢者とのかわり

この場面の中心テーマは、<老いを実感した経験 (4)><感謝されたうれしい経験 (1)><病気でも変わらない高齢者とのふれあい (1)>の3テーマが抽出された。老いを実感した経験では、同居の祖母の短期記憶が低下してきており、いつか自分のことも忘れてしまうのではないかと感じたことや、今まで料理を作ってくれていた祖母が急にしゃべれなくなって病院に行ったら脳梗塞であった時の切ない感覚、自営業で頑張っていた祖父の腰が曲がってきた様子を見るとさびしい気持ちになるといったものであった。感謝されたうれしい経験では、末期癌の祖父が最後に「ありがとう」といつてくれた場面であった。病気でも変わらない高齢者とのふれあいでは、認知症の祖母は自宅までの道のりもわからなくなっていたが、それでも、お金の事を心配して自分の所へ持って来るなど、優しい祖母であることには変わらなかったという経験であった。

2-9) ボランティアでのふれあい

この場面の中心テーマは、<感謝されたうれしい経験 (8)><怖いとってしまった経験 (2)><勉強になった高齢者の言動 (1)>の3テーマが抽出された。感謝されたうれしい経験では、認知症の方とお話をしているとき、自分を妻だと思っているのかと思っていたが帰り際に「きょうは母さんになってくれてありがとう。久しぶりに心が晴れたよ。」と言って頂いた。その時はよく理解できなかったが、その後施設の方から詳しい説明をきいて感動したという経験や、部活で楽器の演奏会を開催するために老人ホームに行った時、来年もまた来て欲しいなど優しい言葉をかけ

てもらったこと、ベッドに寝たままでもベッドごと演奏を聞きに来てくれ喜んでくれた経験からであった。怖いとってしまった経験では、高校生の時のふれあい看護体験で関わった患者様が顔にあざがあって怖いなどと思ってしまう、こちらが壁をつくってしまった。すると、相手にも心を開いてもらうことはできず、帰りなさいと言われた経験であった。勉強になった高齢者の言動では、ボランティアでリネンチェンジや食事介助を実施した際、孫の話や義眼であることなどのお話を沢山して下さり、そのひとつひとつが心に残ったというものであった。

V. 考 察

1. 記述されたエピソードの対象者

エピソードの対象者のうち、157名中97名(61%)が曾祖父母もしくは祖父母であった。一方157名中60名(38%)が間柄としては知人もしくは知らない人であった。中野⁹⁾は、高齢者イメージに影響する要因として、祖父母との交流が重要であり、大谷と松木⁸⁾は、看護学生が高齢者と聞いて思い浮かべる人は、「祖父母」が約7割であると報告している。半数以上は家族としての高齢者、すなわち、曾祖父母・祖父母の存在が表出される一方で、核家族化が進み、日常生活の中で高齢者との関係性がほぼないに等しい環境では、バイトやボランティア活動、高校時代の高齢者との交流プログラムなども大きく看護学生の高齢者に対する印象に何かしらの影響を与えていることがわかる。しがたって、看護学生の老年者に対するレディネスを捉えようとする時、単に、祖父母との同居や存在の有無を引き出すだけではなく、バイトやボランティア活動、課外活動といった大学入学前の学生の活動に対しての関心を示すことが必要であると示唆される。

2. 肯定的な中心テーマから

一番多く記述された場面は、「子どもの頃の思い出」であり、“勉強になった”“感謝されたうれ

しさ”“優しくされたうれしさ”といったように、肯定的な中心テーマが多くみられた。子どもの頃の思い出の場面は、家で遊んでもらった場面や買い物、正月の出来事など、日常的な範囲での場面が多く抽出されていた。ここに、いかに日常生活の自然な流れの中で高齢者と関わるのが、学生が高齢者を肯定的に捉える、もしくは、高齢者イメージをポジティブに捉えるという事に影響を及ぼすことがうかがわれる。

日常生活の中で高齢者と関わるということは、単に一場面を共有するというのではない。遠藤ら¹⁰⁾は、世話を受けた者の高齢者イメージの方が肯定的であり、高齢者イメージに強く影響を与える因子としても「高齢者から世話をうけた経験」が抽出されている。そして高野¹¹⁾は、「高齢者から世話を受ける行為を通して、高齢者の経験や知識の深さに触れ偉大さを感じ、注いでくれる愛情と感情的支援を得ることで好意や評価が高まる」と述べている。以上から考えると、日常生活そのものの中に高齢者のいる暮らしというのは、子供である学生達は世話になる機会もあり、そこから高齢者に対しての感謝や尊敬、寛大な感覚など好意的な感情をもつことも考えられる。よって、身近に高齢者が存在していた生活環境にあった学生に、今までもっとも良く覚えている高齢者との体験について尋ねると、何気ない日常的な子供の頃の思い出と肯定的なテーマが抽出されてくると考えられる。

「病気の高齢者とのかわり」の場面においても、肯定的な中心テーマが抽出されていた。病気だからできないというネガティブな捉えではなく、病気に罹患したからこそ伝えてもらえた高齢者からのメッセージを受け取る重要な機会に遭遇している学生もいることがここから見える。

3. 否定的な中心テーマから

“理不尽な思い”と“怖いと思ってしまった”の中心テーマは、場面を混合すると10テーマが抽出されている。そのエピソード対象者の9名は

学生にとって知らない人であった。なお1名もボランティア上の知人であり、家族との間柄でこの中心テーマが抽出されることはなかった。特に“理不尽な思い”での中心テーマでは、バスや電車、駅やエレベーターで突然罵倒された出来事、バイト先での出来事などが学生の印象に強く残っていることがわかる。祖父母といった家族とはちがひ、長年の関わりがなく、安心感や信頼感がない相手から突然罵倒されたネガティブな経験は、高齢者イメージを否定的に形成すると考えられる。学生が臨地実習などで出逢う受け持ち対象者も、決して家族ではなく、初めて出逢う他人である。この中心テーマの単純集計数は157名中9名と少数であるが、この9名の学生にとっては、初めて接する高齢者に対しての何らかのネガティブなイメージや苦手意識と共に臨地実習に参加することにもなりかねない。効果的な実習指導をすすめるためには、学生の過去の体験として、こういった出来事の有無の存在へも関心をむけることが重要と捉える。

“納得ができない出来事”の場面からの抽出では、認知症の症状によって短期記憶が障害され、それが日常生活に影響した結果、学生との関わりの中でも不具合を生じたものがあつた。認知症は物忘れをするといった一般的な知識はマスコミ等を通じて触れていることも考えられるが、実際に日常生活でどのように影響が生じるのかを理解するにはいたっていない。そのため、納得ができない出来事として想起されるのであろう。しかし、もし、事前に十分な知識があれば、この様な印象をもったエピソードとはならなかったとも考えられる。大学入学以前からの高齢者観に対する教育や地域ぐるみの認知症ケアの取り組みもまた重要と考える。小学校の高齢者観の育成に関する現状報告の中で前原と永浜¹²⁾は、現在の小学生は「高齢者との直接的な生活体験が欠如したり、両親と祖父母の疎遠関係だったり、家族の不仲や家庭生活が多忙であるなど、現代の小学生の抽象概念を用いた高齢者観の形成がなされていない」と述べ

ている。さらに、「学童期は多様な他者との関係を持ち、社会的な相互作用を実際の集団生活の中で経験的に深く理解していく基礎的な学校教育を受ける時期である」としている。なぜ、自分は駅で突然罵倒されたのか納得できないとする学生だが、もしかしたら、そこには、その学生が感じなかった社会的な相互作用があったかもしれない。学生が否定的に中心テーマを捉えた事は事実として直に受け止める必要がある。同時に、大学入学前の高齢者観に関する教育も重要であることが伺える。また、前原と永浜¹³⁾は、生活観の異なる高齢者と関わることや知る体験によって豊かな高齢者観を身につけることは、世代間の相互理解を図り、子どもの成長・発達を助長する教育は有効であるとしている。看護は人と人との繋がりであり立つ活動であり、看護の質を向上するためには、より深い対象理解が深いが必要とされる。その中で、小学生からの高齢者観に関する教育がなされることは、看護界全体の質の向上にもつながると考える。

4. 日常生活の中での自然な高齢者とのかかわりと世代間交流の意義

親の高齢者に対する接触や姿勢が、子の高齢者へのイメージに影響を与えている⁸⁾とも言われているが、本研究においては、このような言及には及んではない。それは、今回は、今までもっとも良く覚えている高齢者との体験についてのエピソードの記述であり、直接的な高齢者イメージとその関連要因として家族背景を調査したものではない。したがって、本研究において、親の高齢者に対する態度が影響したものはなかったと思われる。とはいうものの、核家族化がすすみ、祖父母をはじめとする日常的な高齢者との関わりの機会が減少している。

世代間交流における高齢者は、身体的な衰え、人生経験に基づく知恵や心の豊かさ、そして寂しさと喜び等さまざまな行動・感情を表出する¹⁴⁾。このような高齢者の行動・感情を観察することで、

学生は老年者の多様な存在が実感できると述べている。また、松尾と谷口¹⁵⁾も、高齢者観の形成やケアの質には、小さい頃からを含めた世代間交流や実習教育での思い出・体験を通して、いたわりなどの道徳観念を培う必要があるとしている。祖父母を中心としたエピソードの対象と肯定的中心テーマのいくつかの部分からは、高齢者との日常生活の中での優しさから、人と人の信頼感や自分に対する価値観が生じているものがあつた。また、死に向かい合う経験から学生の死生観の構築にも寄与するものと考えられる。日常的な高齢者との関わりの機会が少ない現状では、世代間交流教育が老年看護学教育にとってより重要な位置づけであり、学びを学生と共に共有する中でその方向性を示し、対象理解を深めるために高齢者の言動を学生間で討論させる場をつくる必要性も示唆された。

VI. 結 語

本研究において、学生の高齢者との関わりの背景の一部を捉える機会となった。その中で、祖父母をはじめとした家族との関わりが肯定的な中心テーマを構築していた。また、間柄のない高齢者との関わりでは、否定的な中心テーマも抽出された。様々な背景をもった学生達であることを念頭におき、学生の老年看護学におけるレディネスの把握につとめることが重要である。よって、世代間交流の場を含みながら、なんらかの形で学生達の高齢者観が共有できる場がもてる授業展開の構築をすることで一層の学習効果が期待できると考え、高齢者を看る視点が養われるよう、次年度の課題として取り組んでいきたい。

謝 辞

調査にご協力いただいた学生の皆様に感謝いたします。

文 献

- 1) 中島紀恵子：系統看護学講座 専門20 老年

- 看護学第6版. 4-5, 東京, 医学書院, 2005.
- 2) 紺谷英司, 高岡哲子, 深澤圭子, 渡邊朋枝: 通所施設見学において看護学生がもった老年者観の検討. 名寄市立大学紀要3: 39-47, 2009.
 - 3) 清水初子, 水戸美津子, 流石ゆり子: 老年看護学における教育方法としての体験学習—「高齢者疑似体験」学習に関する文献検討から—. 山梨県立看護大学紀要2 (1): 73-85, 2000.
 - 4) 池田敏子, 伊東久恵, 太湯好子: 老人に対するイメージとその形成に影響する因子. 第22回日本看護学会集録 (看護教育) 92, 1991.
 - 5) 大塚邦子, 正野逸子, 日浦瑞枝, 白井由里子: 看護学生の老人のイメージに関する研究—SD法によるイメージ評価と描画特徴とを中心—. 老年看護学4 (1): 98-104, 1999.
 - 6) 水田真由美, 天津榮子, 水主千鶴子: 看護学生の高齢者育成に関する研究—1年次から2年次における高齢者観の分析—. 和歌山県立医科大学看護短期大学部紀要2: 23-30, 1999.
 - 7) 保坂久美子, 袖井孝子: 大学生の老人イメージ: SD法による分析. 社会老年学27: 22-33, 1988.
 - 8) 大谷英子, 松木光子: 老人イメージと形成要因に関する調査研究. 日本看護研究雑誌18 (4): 25-38, 1995.
 - 9) 中野いく子: 児童の老人イメージ—SD法による測定と要因分析—. 老年社会学: 23-36, 1991.
 - 10) 遠藤礼美, 小笠原サキ子, 仲村美紗子: 看護学生がもつ高齢者イメージとその関連因子—祖父母らとの生活経験に焦点をあてて—. 日本看護学会論文集 老年看護 41: 156-159, 2010.
 - 11) 高野真由美: 看護学生の背景による老人イメージ, 知識, エイジズムの相違—FAQ, FAS, SD法を用いての分析—. 日本看護学会論文集 (看護教育) 38: 147-149, 2008.
 - 12) 前原なおみ, 永浜明子: 小学校の高齢者観の育成に関する現状報告. 大阪教育大学紀要58 (2): 78-91, 2010.
 - 13) 前原なおみ, 永浜明子: 小学校の高齢者観の育成に関する現状報告2—地域を支える子ども育成の視点から—. 実践学校教育研究 13: 51-58, 2010.
 - 14) 佐藤敏子: 老年看護学教育において世代間交流を学ぶ意義. 老年看護学 老年看護学 10 (2): 77-84, 2006.
 - 15) 松尾真佐美, 谷口幸一: 高齢者福祉施設職員の高齢者観とその関連要因. 高齢者のケアと行動科学 12 (1): 35-40, 2006.

表 1. 記述された場面設定と中心テーマ

場面	中心テーマ（テーマ抽出数）
生き生きとした高齢者とのふれあい	一緒に過ごしたうれしさ (3)
	一緒に遊べた楽しさ (1)
	勉強になった高齢者の言動 (9)
現在の日常での出来事	優しくされたうれしさ (9)
	感謝されたうれしい経験 (1)
	一緒に過ごしたうれしさ (1)
	好みと一緒にだと思いうれしさ (1)
	納得した演歌好き (1)
	勉強になった高齢者の言動 (1)
	迷惑をかけて申し訳ない気持ち (1)
うらやましく思われた経験 (1)	
高齢者との別れ	印象に残る初めての死の経験 (3)
	勉強になった高齢者の言動 (2)
	離れて過ごす寂しさ (1)
納得のいかない出来事	価値観の違いを実感した (2)
	話をきいてくれない憤り (1)
	複雑な思い (1)
子どもの頃の思い出	一緒に過ごしたうれしさ (13)
	一緒に遊べた楽しさ (7)
	一緒に遊ばなくなった悲しさ (1)
	感謝されたうれしい経験 (5)
	優しくされたうれしさ (25)
	大切にされたうれしさ (1)
	怖いと思ってしまった経験 (2)
	大切な人を失う寂しさ (2)
	勉強になった高齢者の言動 (13)
	迷惑をかけて申し訳ない気持ち (3)
	理不尽な思い (1)
仕事や学習の場での出会い	感謝されたうれしい経験 (2)
	信頼されたうれしい経験 (1)
	勉強になった高齢者の言動 (2)
	理不尽な思い (1)
知らない人との出会い	感謝されたうれしい経験 (7)
	怖いと思ってしまった経験 (2)
	席を譲る経験 (2)
	勉強になった高齢者の言動 (3)
	優しくされたうれしさ (4)
	迷惑をかけて申し訳ない気持ち (1)
	理不尽な思い (7)
老いを実感した経験 (4)	
病気の高齢者とのかかわり	感謝されたうれしい経験 (1)
	病気でも変わらない高齢者とのふれあい (1)
	感謝されたうれしい経験 (8)
ボランティアでのふれあい	怖いと思ってしまった経験 (2)
	勉強になった高齢者の言動 (1)

Characteristics of Episodes with Elderly People as Described by Nursing Students

— An investigation in terms of “the scene setting” and “the main theme” —

YANO Reiko, TAKAOKA Tetsuko, SAKAKIBARA Chisako and KOHEI Yukari

Abstract: The objective of this study is to gain a new insight into characteristics of episodes which nursing students described in terms of “the scene setting” and “the main theme”, in hopes of using the findings as a basic resource for geriatric nursing education. The participants in the study were 175 second year students in the nursing department of a four-year college. Data were collected and analyzed by asking the participants to write about “the most memorable experience they had with elderly people in about 100 Japanese characters”. Data analysis clarified the terms “the scene setting” and “the main theme” in the description, and the contents were examined among the researchers.

Regarding the scene setting, the following nine scenes were yielded: “relationship with lively elderly people”, “present daily events”, “separation from an elderly person”, “childhood memory”, “meeting through work or study opportunities”, “meeting with strangers”, “involvement with sick elderly people”, and “meeting through volunteer activities”. Among these two to nine “main themes” were extracted.

An impression is formed from the episode, and from there the participants form images about nursing. Assuming that the participants' image about nursing may affect care, it can be suggested that teachers need to show direction and have students discuss the meaning of elderly people's traits in order to provide students with opportunities where they can cultivate the ability to see elderly people from various points of view.